

ブラジル 日本語教師 & 子どものページ

一協カ一
Saúde Global em Harmonia
Yakult

経験生かした指導法 熱血コーチは朝倉先生

ブラジルの日本語教育はこれまで、日本語学校が授業の一環として考える野球や陸上などのスポーツとともに歩んできた。

子どもたちは授業では日本語を学び、休日に行われるスポーツでは、日本人として、あるいは日系人として、身に付けなければいけない礼儀を学んだ。また、日本語学校で行われるこれらのスポーツは、子どもたちが学校に通う大



ソフトボールの指導をする朝倉先生

ボールを追って赤土駆ける子どもたち

ピンドラーマ日本語学校、ソフトボールを授業に取り入れ

赤土の大きなグラウンドを持つ聖州ピンドラーマ市のピンドラーマ日本語学校（山崎松男校長）は、ソフトボールの授業を行っている。指導するのは、保育系の短大時代に、昼はソフトボール、夜はカラオケという学生時代を過ごしたという朝倉恵先生（45、大阪）だ。

きな理由ともなっていた。しかし、各地で日本語学校の減少が進む現在では、スポーツを授業として取り入れる学校も大分少なくなってしまった。ピンドラーマ日本語学校でも、立派な赤土のグラウンドでの野球や陸上、屋内での剣道が行われていた時期があったが、生徒数の減少や指導者の不足でこれらのスポーツの授業もなくなってしまった。

そのような中、同校で新しくソフトボールの授業を始めたのが、朝倉先生だ。

日本の養護施設や小学校で約5年間働いた後、1992年に農夫良さん（51、3世）と結婚し、ブラジルに移住した。同

校には、約7年前からかかわっている。

中学校時代からソフトボールをやっており、長年続けたソフトボールの技術や知識を同校での指導に生かしているというわけだ。

ところが、同校にはかつて野球や陸上で利用されていたグラウンドはあっても、グローブやバットな



校舎の前で集まる写真

どソフトボールの道具が残されていない。そのため、しばらくの間はグローブを付けずにソフトボールをしなければならぬ生徒たちも多かった。

JICAからの道具の補助も受けたが、ブラジルではマイナースポーツであるがゆえに、高い費用がかかるソフトボールを続ける難しさはそう簡単に消えるものではない。

それでも、ソフトボールの指導を続ける朝倉先生の姿勢は日系社会で大事にされるべきものだろう。



ボールをとる男子児童

日本の ものがたり 「つるのおんがえし」

提供：ブラジル日本語センター

むかし、ある村に、よさくという若者が住んでいました。毎日たぎぎを売りに町まで出かけていました。ある冬の日、いつものように町へたぎぎを売りに行きました。日がくれて家に帰るとちゅうのことでした。「バタッ バタッ」ゆきの中で音がします。近づくと一わのつるがわなにかかっていた。よさくは、わなをはずしてあげました。つるは、空へまいあがりました。そして、おれいを言うようによさくの上をぐるぐるとんでいきました。

その夜、よさくの家の戸をたたく音がします。よさくが戸を開けるとそこにむすめが一人立っていました。「おやおや、こんなゆきの日にどうしましたか」よさくが聞くとむすめは、「大ゆきで道にまよいました」とこたえました。

よさくは、かわいそうに思っこのむすめをとめてあげました。むすめの名は、おつるといいます。

つぎの朝、よさくは、たぎぎを売りに町へ出かけました。おつるが、言いました。「よさくさん、私ははたをおることが出来ます。糸を買ってきてください」よ



さくは、糸を買って帰りました。「これからは、はたをおります。私のはたをおっている間、けっしてへやの中を見ないでください」

よさくは、やくそくしました。その日、おつるは、ごはんも食べないではたをおりつづけました。よさくは、心ばいになりました。でも、おつるとやくそくしました。中を見てはいけません。

三日目のばん、おつるが、へやから出てきました。手には、きれいなたんものを持っていました。「よさくさん、あした町へ行った時にこのたんものを売ってください」と言ってよさくにわたしました。

それは、うつくしいおりものでした。つぎの朝、よさくは、町へ出かけて行きました。「たんものは、いりません。うつくしいたんものです」そう言って歩いていました。ちょうどその時、とのさまが通り、「めずらしいたんものだ。気に入った。買おう。また持ってまいれ」と言ってたかさんのこばんをよさくにわたしました。よさくは、そのお金でたかさんの食べ物と糸を買って帰りました。よ

さくからその話を聞いておつるは、とてもよこびました。そして、おつるは、またはたをおりにへやに入っていました。

三日がたつと、前よりもつづくしいたんものができました。でも、おつるは、ひどくやせていました。よさくは心ばいで言いました。

「もう、はたをおるのは、止めよう。これがさいごのたんものだ」つぎの日、たんものを持って町へ行きました。とのさまはたんものをみて、「前よりもつづくしい。もう一つ持ってまいれ」と言いました。「もうしわけありません。これでさいごにしてください」そうよさくが、ことわると、とのさまは、おこっしてしまいました。とのさまの言うことは、まもらなければいけません。よさくは、おつるに、わけを話しました。

「しかたがありません。もう一度おりましょう。でも、けっして中を見ないでくださいね」そう言っはたをおり始めました。

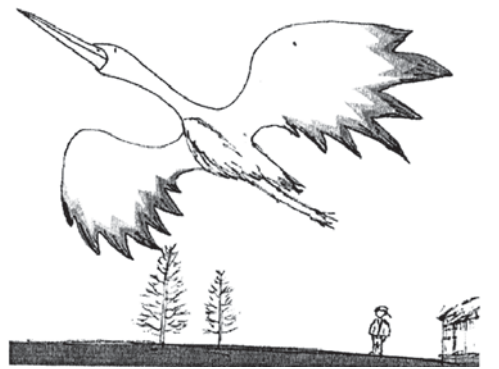
よさくは、やせているおつるが、心ばいではありません。よさくは、がまんできないでそつと中を見ました。すると、そこには一わのつるが、大きい羽根を広げ、くちばしで、はねをぬいて、糸の間におりこんでいました。

はねは半分なくなり、かわいそうなすがたになっていました。そのばん、おつるは、できたたんものを持ってへやから出てきました。そして、言いました。



「私は、あなたにたすけられたつるです。ごおんをかえしたいと思ってきました。でも、ほんとうのすがたを見られたので、ここには、いることができません」「待ってくれ、つるのままでもいいから」とよさくは、止めましたが、おつるは、つるのすがたになって空へとんでいきました。

「カウー カウー」とかなしそうになきながら、山の方へきえていってしまいました。



イラスト=ブルノ・ケンイチ・タマネ



【学校お問い合わせ(パラナバイ文協)】
Rua Mario Palo, 135 - Jardim Nakamura,
Paranavai - PR, CEP: 87701-140
Tel: (44) 3423-1772

特に太鼓部の活動は活発で、舞台だけでなく大会の前には自身が文協会員ではない日系人も応援に訪れるほど地域から愛されている。過去にブラジル代表として日本で開催された全日本大会へ出場したこともあり、人気・実力ともに全伯トップクラスを誇る。

日本語学校は現在、午後1時半から同3時までの部と、午後7時半から同9時までの夜学を開講している。2012年2月1日からはそれぞれ30分延長し、2時間の授業となる。

【年間行事】
9月11日春祭り(太鼓部、よさこいチームが出場) 12月11日日本語能力試験(今年初参加)
文協の運動会に毎年参加するほか、季節の行事は日本から派遣されるJICA青年ボランティアの日本語教師の意向に沿って執り行われる。

【教師・生徒数】
教師4人、うちJICA青年ボランティア1人。生徒20人。
生徒の割合は日系50%、非日系50%

【代表者】
福島マサル校長(日系2世)

【授業の方針】
生徒は家庭で日本語を使う機会が少ないため、授業ではポルトガル語で補足説明を加える。絵やカードを用い、クイズ形式でひらがな、カタカナ、漢字の書き方を指導する。

【学校の特徴】
パラナバイ文協の中に設立。午後開講の部では主に子ども、夜学では50代までの生徒が学んでいる。習熟度の異なる生徒が共に学ぶ複形式形態。

子どもたちの中には、同じく文協傘下の太鼓部、よさこいソーラン、ソフトボール、カラオケに参加する生徒もいる。

ぼくらの学校 私たちの教室

パラナバイ日本語学校

教師4人、うちJICA青年ボランティア1人。生徒20人。
生徒の割合は日系50%、非日系50%